TURN

TURN FES 2

DOCUMENT BOOK 2016

Cultural Olympiad

TOKYO 2020

TOKYO 2020 PARALYMPIC GAMES

TURNフェス2
ドキュメントブック2016

「TURNフェス2」開催概要

会　期	平成29(2017)年3月3日(金)～5日(日)
開室時間	9:30～17:30(最終入室は17:00)
会　場	東京都美術館(東京都台東区上野公園8-36) 1階　第1・第2公募展示室、 講堂 ※講堂は5日(日)のカンファレンスのみ
入　場	無料
監　修	日比野克彦(アーティスト、東京藝術大学美術学部長・美術学部先端藝術表現科教授)
主　催	東京都、アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)、 特定非営利活動法人 Art's Embrace
協　力	東京都美術館×東京藝術大学「とびらプロジェクト」
運営補助	TURNフェス・サポーター

TURN FES 2 outline

Period	Friday, March 3 – Sunday, March 5 2017, 9:30–17:30 *Last admission 17:00
Venues	1F Citizen's Gallery 1・2 and Auditorium, Tokyo Metropolitan Art Museum *The auditorium only be used for the conference on Sunday, March 5.
Admission	Free
Supervisor	Katsuhiko Hibino (Artist, Dean of the Faculty of Fine Arts & Professor, Department of Intermedia Art, Tokyo University of the Arts)
Organized by	Tokyo Metropolitan Government, Arts Council Tokyo (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), the nonprofit organization Art's Embrace
Cooperated by	Tokyo Metropolitan Art Museum & Tokyo University of the Arts "Tobira Project"
Support	TURN FES Supporters

TURNフェス2
会場風景

MEETING AND CONNECTING WITH
PEOPLE FROM VARIOUS BACKGROUNDS.
A CONFLUENCE OF DIVERSE TYPES
OF INTERACTION !
TURN
TURN FES 2
多様な人と出会い、つながる。さまざまな交流のかたちが集結！
TURNフェス2
2017年3月3日(金)－5日(日)
3(Fri)－5(Sun), March. 2017
開室時間 9:30－17:30（最終入室 17:00）／入場無料
OPEN 9:30－17:30 (Last admission 17:00) / Admission Free
公募展示室 F-2
Citizen's gallery
TURN
受付

TURN FES 2
ここから先で、聞いたことは
一切誰にも・・・話してください。
ここから先で、見たものは
二度と思い出しては・・・いいです。
ここから先で、拾ったものは
小枝一つ、葉っぱ一枚、
持ち帰るべからず・・・ではありません。
ここから先で、起こっている出来ごとたちを
ここに来る前までのところで
起こしてはいけない・・・ではありません。
日比野克彦

TU
RN

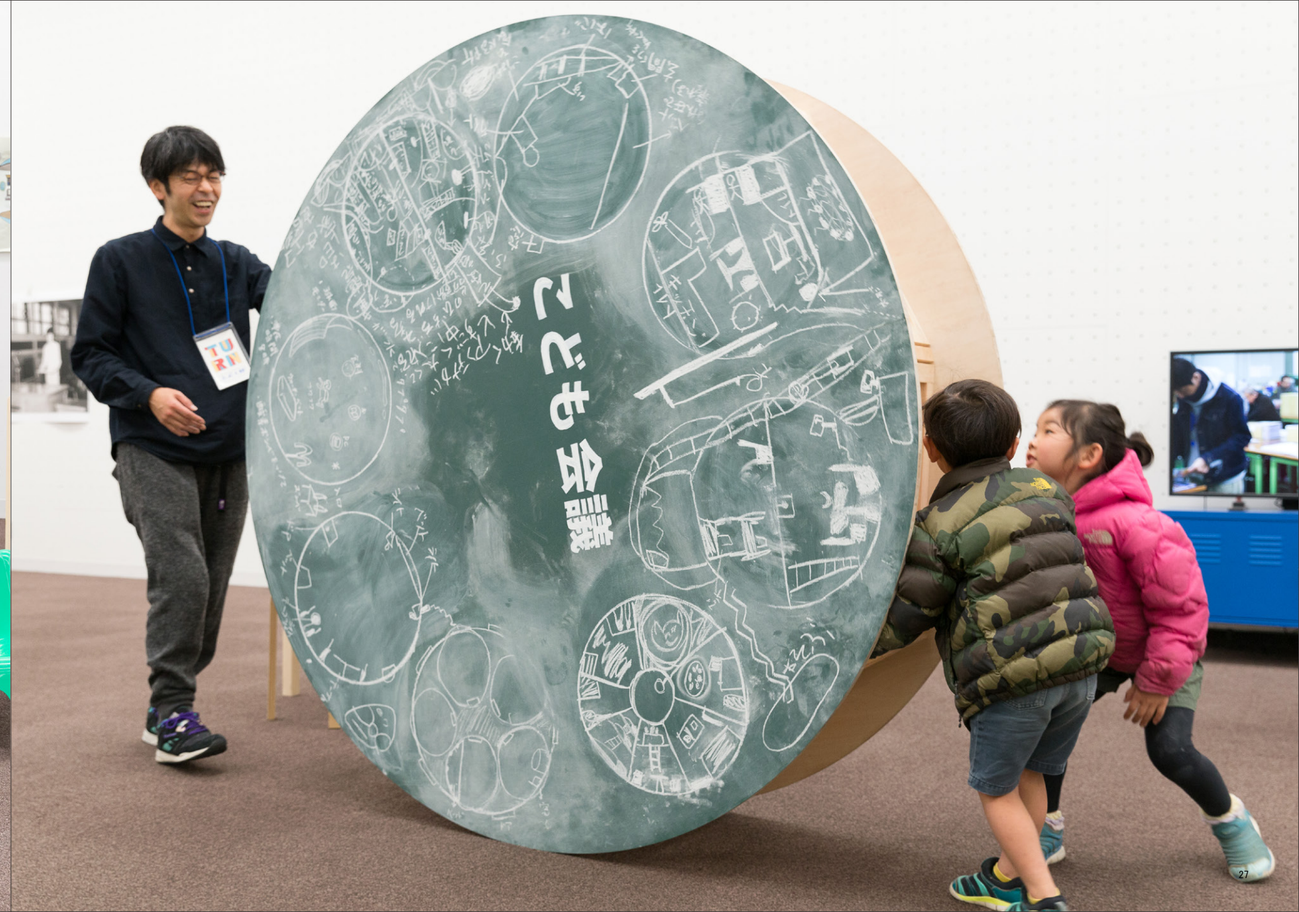
目で観る、耳で観る、心で観る
より良い視創システム構築の
ために今できること
観るを一つに
TA-NET
UDトーク

TA-NET
UDトーク

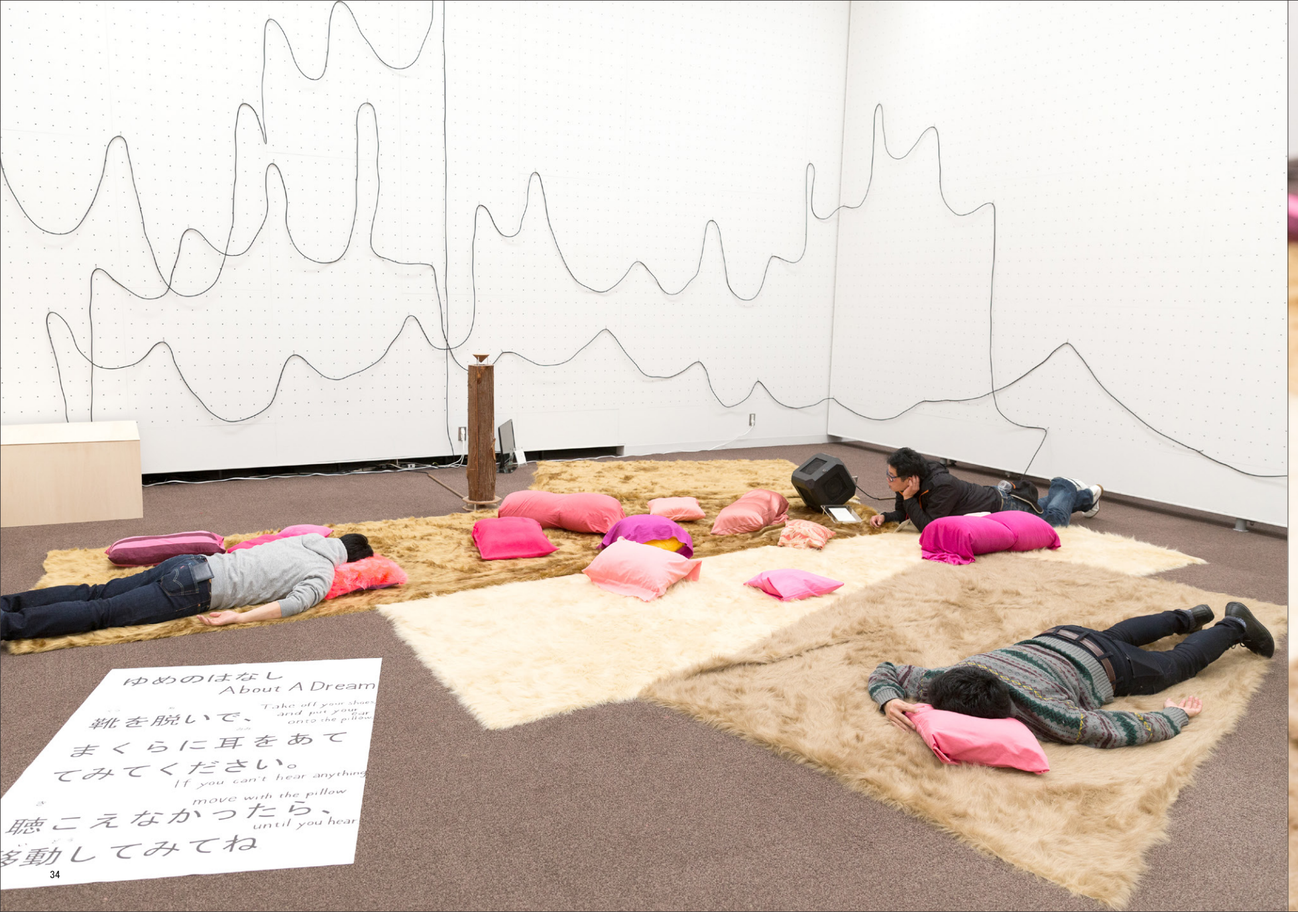
道路を守る車
電車
ヨーグルト
絵を書く
糸会をかくこと
障害者手帳の特典を
フルに活用して都営地下鉄
都電・都バスに乗車し
様々な見聞を深める事
バス
☆この世は
とってもすばらしい
今日
空って

Lions

EPSON



Tokyo


ゆめのはなし
About A Dream
靴を脱いで、
Take off your shoes
and put your ear
onto the pillow
まくらに耳をあて
てみてください。
If you can't hear anything
move with the pillow
聴こえなかったら、
until you hear
移動してみてね

カンファレンス
「TURNの社会的役割を検証する」

開催概要

会 場：東京都美術館 講堂　日 時：2017年3月5日(日) 14:00 ～ 17:00 (開場 13:30)
入 場：無料 ※事前申込不要　サポート：手話通訳、UDトークによる文字支援

タイムスケジュール

14:00 – 14:20　「TURN」年次報告
登壇者：奥山理子 (アーツカウンシル東京 TURN コーディネーター)

14:20 – 15:00　基調講演 1：
「アートを地域経営のOSに BEPPU PROJECTの活動」
登壇者：山出淳也 (NPO 法人 BEPPUPROJECT 代表理事、アーティスト)

15:00 – 15:10　休 憩

15:10 – 15:50　基調講演 2：
「社会参加を支える － 社会資源としての保険 －」
登壇者：榎本重秋 (ぜんち共済株式会社 代表取締役社長)

15:50 – 16:00　休 憩

16:00 – 16:45　クロストーク
「アートが社会の中で役割を果たすために発揮できる力は、まだまだある」と語る監修者の日比野克彦の発言を起点に、ダイバーシティが謳われる昨今の社会背景を、まちづくり、社会制度から相対的に分析し、目指すべき社会の姿を構想する。
登壇者：山出淳也 (NPO法人BEPPUPROJECT代表理事、アーティスト)
榎本重秋 (ぜんち共済株式会社 代表取締役社長)
日比野克彦 (TURN監修者)
ファシリテーター：森司 (アーツカウンシル東京TURNプロジェクトディレクター)
奥山理子 (アーツカウンシル東京 TURN コーディネーター)

16:45 – 17:00　質疑応答

作家略歴 + 施設紹介

森山 開次（もりやま かいじ）

ダンサー・振付家。2001年エディンバラフェスティバルにて「今年最も才能あるダンサーの一人」と評された後、演出振付出演するダンス作品の発表を開始。2001年『夕鶴』以降、『KATANA』『弱法師』など和の素材を用いた独自の表現世界で注目を集める。2007年ヴェネチアビエンナーレ招聘。2012年発表『曼荼羅の宇宙』にて芸術選奨文部科学大臣新人賞ほか三賞受賞。2013年スポーツ祭東京（東京国体）開会式 式典演技メインパフォーマー。平成25年度文化庁文化交流史。ひびのこづえ、川瀬浩介との協働『LIVE BONE』を国内外20都市以上で上演を重ねるほか、演劇・映画・広告など幅広い媒体で活動。

社会福祉法人松花苑（しょうかえん） みずのき

1959年に京都府亀岡市に開設した知的障害のある人たちが暮らし、活動する場。言葉の意思疎通が困難な人たちの、「個別性」を尊重し、自然や人（自分自身も含み）とかかわる、有機肥料づくり、絵の時間、パーカッションの時間、などを提供し、「主体的に生きる」瞬間をたいせつにしている。1964年に設けられた絵画教室は、その取り組みと作品が、日本のアウトサイダー・アート、アール・ブリュットの草分けとして国内外で注目された。

認定特定非営利活動法人 クリエイティブサポートレッツ

障害児者通所施設「アルス・ノヴァ」
私設公民館「のヴぁ公民館」

レッツは、障害や国籍、性差、年齢などあらゆる「ちがい」を乗り越えて人間が本来もっている「生きる力」「自分を表現する力」を見つめていく場を提供し、様々な自主企画をとおしてソーシャルインクルージョンの道を模索している。

山城 大督（やましろ だいすけ）

1983年大阪生まれ。名古屋在住。美術家、映像ディレクター、ドキュメント・コーディネーター。岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー［IAMAS］修了。京都造形芸術大学卒業。東京藝術大学大学院映像研究科博士後期過程退学。映像メディアを用い、その場でしか体験できない《時間》を作品として展開する。近年は、映像メディアの編集理論を空間に再構築する手法『センソリーメディア』作品の開発を手がける。2006年よりアートコレクティブ Nadegata Instant Party（中崎透＋山城大督＋野田智子）を結成し、市民参加型プロジェクトを全国各地の美術館、芸術祭で発表。また、山口情報芸術センター［YCAM］にてエデュケーターとして、オリジナルワークショップの開発・実施し、教育普及プログラムのプロデュースを担当（2006–2009年）。水戸芸術館、アーツ前橋、多摩美術大学、愛知大学などでのオリジナルワークショップを行うなど、人材育成事業にも数多く携わる。2013年には1年間に渡って映像表現を再考するプロジェクト「東京映像芸術実験室」を主宰し、企画内で制作発表したインスタレーション作品《VIDERE DECK / イデア・デッキ》が第18回文化庁メディア芸術祭審査委員会推薦作品を受賞した。主な展覧会に「六本木クロッシング2016展：僕の身体、あなたの声」（森美術館）、「Wrap around the Time」（ナムジュン・パイク・アートセンター）などがある。プロジェクト／出来事とドキュメント／記録」における映像での可能性について日々探求する。

アプローズ南青山（みなみあおやま）

一般社団法人アプローズが、平成26年4月1日に開設した、東京都指定障害福祉サービス事業所（就労継続支援B型）。大人の発達障害など、障害のある方が、仲間とともにフラワーアレンジメントの技術を学びながら働く場。アプローズの運営する花屋「BISTARAI BISTARAI（ビスターレ・ビスターレ）」では、花を通じたウェルフェアトレードを提唱する日本初のフラワーショップとして、心から喜ばれる花束・アレンジメントを創作している。BISTARAI（ビスターレ）とは、“ゆっくり、ゆっくり”という意味のネパール語。こころやからだに障害のあるアーティストたちが“ゆっくり”と丁寧に完成させる作品に期待と祈りを込め“ビスターレ・ビスターレ”と名付けた。ビスターレは店舗を持たないアトリエスタイルのショップ。贈る方や贈られる方の想いにまで心を寄せたオーダーメイドの商品をひとつひとつ手作りしている。アーティストたちの作品がお客様のもとに届くとき、彼らの日常も輝く。贈って楽しく、もらって嬉しく、誰もが笑顔になる happy なギフト。

＊ウェルフェアトレードとは“Welfare ＝社会貢献”と“Fair trade＝公正な取引”を掛け合わせた造語で、社会的弱者と言われている人たちの作る製品などを適正価格で購入することによる社会的支援活動のことである。

今井 さつき（いまい）

1988年神奈川県出身、横浜在住。2013年愛知県立芸術大学美術研究科デザイン専攻修了、東京藝術大学大学院先端芸術表現専攻在籍中。
体験者が作品を体験することで完成するコミュニケーションアートの制作や、日本の社会をテーマに制作を行う。
代表作は、体験者の持ち物を万華鏡の姿に変える「Raybox」や体験者を巨大な海苔巻きのレプリカで巻いて完成させる「人間ノリ巻き」など、その場に足を運ばなければ感じることの出来ない体験・コミュニケーションを生み出している。

シューレ大学（だいがく）

1999年に必要とする若者たちと準備会をつくって生まれたオルタナティブ大学。履修すべきカリキュラムなどなく、一人ひとりが自分の教育をデザインし、自分の知りたいこと表現したいことに取り組んでいる。自分はどのように生きていきたいのか、お金とどんな風に付き合い生み出していきたいのか、人や社会とどうつながるのが自分に合っているのかを模索する、自分に合った生き方を創り出す大学。通う日にちや関わり方も人に合わせて違った形をとっている。在籍期間も自分で決める。自分がこの自分で生きていけるなあと感じたら巣立っていくというような場である。18歳以上の若者達が30～40人で話し合いながら場の運営もしている。自分とは何者なのか、自分はどう生きていけるのかを思い切り試行錯誤できる場でありたいと思っている。安心して人とつながり、だから存分に関心を探し、深められるのではないかと、そんなことを大切にしている。

大崎 晴地（おおさき はるち）

1981年東京都生まれ。2014年東京藝術大学大学院美術研究科博士課程修了。博士（美術）。心と身体、発達のリハビリテーション、精神病理学の領野にかかわりながら作品制作、研究活動をしている。近年の「エアートンネル」（2013）は児童福祉施設などで発達や療育にも活用している。近年の展示に「新しいループ・ゴールドバーグ・マシーン」（KAYOKO YUKI・駒込倉庫、東京、2016）、「凸凹の凹凸～さわってみるこの世界～」（鞆ノ津ミュージアム、広島、2016）等。2015年に建築家と協働し生活空間のなかにバリアを取り入れる「《障害の家》プロジェクト（Barrier House Project）」を始動。

EAT & ART TARO

調理師学校卒業後、飲食店勤務を経てギャラリーや美術館などでケータリングや食のワークショップ、カフェプロデュースなどを行っている。これまでに、自分で購入したものが次の人のものになってしまう、おごることしかできないお店「おごりカフェ」や、瀬戸内海の島々で作った「島スープ」、昭和の料理本を調査収集し、レシピ再現などを行う「レトロクッキング」、美味しいおにぎりを食べるためだけに参加者と共に運動会をする「おにぎりのための、毎週運動会」など食をテーマにした作品を多数発表している。墨東まち見世（東京・墨田区）、大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ（新潟）、としまアートステーション構想 としまアートステーション Z（東京・豊島区）、瀬戸内国際芸術祭（香川）、中房総国際芸術祭 いちはらアート×ミックス（千葉・市原市）など。

高本 敦基（たかもと あつき）

美術家、2005年フランス国立ナンシー高等美術大学大学院修了。日常生活でみつかる素材や行動の観察から社会と人間存在の繋がりを見いだす作品を制作するほか、地域の廃旅館をアートスペースにした活動『岡野屋旅館プロジェクト』や近年では小学校の教育現場と連帯した美術の取り組みも行っている。2014年、第17回岡本太郎現代芸術賞特別賞、第15回岡山芸術文化賞グランプリ受賞。2015年には福武文化奨励賞を受賞。主な個展に、『JUXTAPOSITION- 平置思考－』（吹上美術館、岡山県倉敷、2015）、『組み立て式の社会』（奈義町現代美術館、岡山県奈義町、2016）、『フレデリック・タイラー氏に花束を』（石川県金沢市、2017）など。

社会福祉法人旭川荘（あさひがわそう）

旭川荘は1956年に開設した総合医療福祉施設。現在、岡山県と愛媛県において医療福祉分野、知的障害分野、身体障害分野、児童・高齢者分野、研修・研究分野で85の事業を展開している。
旭川荘には乳幼児から高齢者まで、さまざまな障害のある人々が生活され、余暇活動や日中活動の一環として多様な作品制作に取り組まれてきた。現在も、絵画・造形・手工芸・音楽など、あらゆる領域で、障害の程度や年齢に関係なく、多くの利用者が芸術活動に取り組まれている。2010年には「旭川荘アートギャラリー」を開設し、利用者の作品を常時展示することができるようになった。

池田 晶紀

写真家。1978年横浜生まれ。1999年自ら運営していた「ドラックアウトスタジオ」で発表活動を始める。2003年よりポートレイト・シリーズ『休日の写真館』の制作・発表を始める。2006年写真事務所「ゆかい」設立。2010年スタジオを馬喰町へ移転。オルタナティブ・スペースを併設し、再び「ドラックアウトスタジオ」の名で運営を開始。国内外で個展・グループ展多数。アーティスト三田村光土里とのアートユニット「池田みどり」としても活動。

川瀬 一絵

写真家。島根県出雲市生まれ。2007年より写真家・池田晶紀の主宰する「ゆかい」に所属。
テーマを定めずに衝動的に写真を撮り、それらを編集しながら衝動の訳を探るような作品づくりをしている。写真集のために家具を持ち込んで空間をしつらえた『粒と穴』(2015)、鑑賞者自らがスイッチを入れてあかりを灯すことで、投影される飛行機の光を見る『北風と太陽』(2016) 等、写真に鑑賞者が立ち会う場の設定に重きをおいたインスタレーションを展開。

社会福祉法人きょうされん
リサイクル洗びんセンター

「福祉と環境をつなぐ」「障害の種別を越えて」「高い給料」を掲げて 1994 年 4 月、東京都昭島市に誕生。
びんやリユースカップの洗浄、とうふの製造・販売、チラシセット作業、食品加工作業、軽作業、物品販売などの仕事に、現在87名の障害のある人が取り組んでいる。障害のある人がいきいきと働き、地域で安心して暮らしていける社会の実現をめざしている。

永岡 大輔

1973年山形県生まれ、東京都在住。 Wimbledon School of Art 修士修了後、国内外にて個展・グループ展による発表多数。
記憶と身体との関係性を見つめ続けながら、創造の瞬間を捉える実験的なドローイングや、鉛筆の描画を早回しした映像作品を制作する。制作の痕跡が意図的に残される作品は作者の記憶ばかりではなく、失われた時間の痕跡としての余韻を空間にもたらす。また、平面や映像作品以外にも、朗読体験を通して人々の記憶をつなげるプロジェクト『Re-constellation』による公演や、現在では、新しい建築的ドローイングのプロジェクト『球体の家』に取り組むなど、様々な表現活動を展開している。

こども会議

こども時代に真剣に考えた事と言うのは、長い時間を経て大人になった心にも届く。大田区内にある 3 つの子ども食堂（居場所）のネットワークから生まれたこども会議では、アーティストとこどもたちが一緒に社会や未来を考えながら、新たなイマジネーションに出会うプロジェクトを実施する。

〈気まぐれ八百屋だんだん〉
東京都大田区東矢口にある居酒屋の居ぬきの場所を借りている八百屋、だけれどただの八百屋じゃない。ワンコイン寺子屋、英会話、読書会、読み聞かせ、ススム寺子屋、こども食堂等々を開催。みんなの居場所と出番を作り出す、民間型の文化センター。

〈キネマフューチャーセンター〉
京急蒲田駅から徒歩 5 分「キネマ通り商店街」の空家をリノベーションして、地域コミュニティ拠点として多様な交流ができる場所。2 階の和室スペースには近隣幼稚園の親子連れにご利用いただいている。月に 1 回「キネマえがお食堂」を開催している。

〈nijiiro*cafe〉
nijiiro*cafe のキーワードは、『ふらっと立ち寄れて』『身体に優しいものでお腹を満たして』『心身がほっこりできる空間』。この言葉を意識しながら、全国の農家さん直送の無農薬野菜の販売、それらを使用した料理教室やキッズクッキングを主催している。月に一度開催している子ども食堂でも、このキーワードを大切にこどもたちを迎えている。

James Jack

アーティスト。1979年アメリカ生まれ。アジア各地のグループ展で、社会と深く関わるプロジェクトを展開。アメリカや日本を中心に個展を開催している。また『ISSUE』、『ジャパンタイムス』、Art Asia Pacific、ハワイ現代美術館など多くのメディアや展覧会カタログに論文や記事が掲載される。2008 ～ 2010年、明仁皇太子奨学金フェロー。現在、Centre for Contemporary Art（シンガポール）に出展中。九州大学ソーシャルアートラボ特別研究員。

Sam Stocker

1977年生まれ。ビジュアルアーティストとして、10年以上にわたりデジタル・ビジュアルアート・ワークショップを企画・運営。英国や日本において青少年や成人を対象にプロジェクトを実施。過去に指導・運営を行ったプロジェクトでは絵画、ビデオ制作、アニメーション、彫刻、グラフィティ、グラフィックデザインを用い、パフォーマンス、展覧会、プレゼンテーションを通してその成果を発表してきた。現在、東京藝術大学大学院美術研究科博士課程油画専攻在籍。

ハーモニー

ハーモニーは世田谷区にある、心の病をもちながら暮らしている人が利用する施設。昼食を食べたり、簡単な作業をしたり、困った時に相談をすることができる場所である。登録者は 30 名ほど。見えないはずのものが見えたり、聴こえないはずのものが聴こえたり、なぜか分からないけど強い確信があったり…統合失調症、うつ病、発達障害などと診断されている人が利用している。ゆっくりとしたペースで、それぞれの人が思い思いに日々を過ごしている。
ハーモニーでは一般就労や収入を得るという価値観から少し離れて、それぞれに数奇な経験や苦労を重ねてきた方たちが共に支え合い、安心して自分らしさを発揮できるような場をめざして活動を行っている。

大西 健太郎

1985年生まれ。ダンサー。その場所・ひと・習慣の魅力と出会い「こころがおどる」ことを求めつづけるパフォーマー。東京藝術大学大学院先端芸術表現科修了後、東京・谷中界隈を活動拠点とする。「風」をテーマとしたダンス・パフォーマンス作品の公演をおこなう。2011年に東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）と〈一般社団法人 谷中のおかって〉の共催によるこども創作教室「ぐるぐるミックス」の立ち上げより、ファシリテーター、統括ディレクターを務める。2014 年より〈風と遊びの研究所〉を開設。他者との共同創作によってつくり出す参加型パフォーマンス「風あそび」に取り組んでいる。

板橋区立小茂根福祉園

〈支援〉
小茂根福祉園は、かけがえのない個性豊かな社会の一員として「私らしく」住み慣れた地域で普通の暮らしができることを願い支援している。自分のやりたいことにチャレンジしたり、様々な人との関わりを通して、人とのつながりを感じたりすることで豊かな人生を送ることができると考えている。支援とは、転ばぬ先の杖ではなく、転んでもまた立ち上がることができるように、寄り添い共に歩むことだと考えている。

〈活動の説明〉
生活介護サービスでは、日常の介護を行うとともに、創作活動や体の取り組み（PT訓練）、行事やアトリエ活動を行っている。就労継続支援Ｂ型サービスでは、「働く」という作業支援を中心に、生活支援、社会活動、行事やアトリエ活動を行っている。作業支援では、企業からの受注作業の他に、清掃作業や KOMONEST商品（グッズ、コーヒー）がある。
両方のサービスで行っているアトリエ活動では、イラストやアート活動を行っている。豊かな感性や、自由な発想で自分らしい表現が生まれている。

あわい～
（富塚絵美、佐藤慎也研究室）

アーティストのチョリ（富塚絵美）と日本大学佐藤慎也研究室のメンバーを中心として構成されるパフォーマンス集団で、間（あわい）と淡い空気感を大切にした作品を発表する。
富塚絵美、佐藤慎也研究室（佐藤慎也、堀切梨奈子、今村文悟、大川碧望、鎌田七海、下村燿子、仲村祥平、大場麻莉子、中村直、柳スルキ、西島慧子、原碧）、久久保由美、金徳喜、齋藤麻生、長谷川綾子、長谷川知広、ハッチュ、マコト（GUYSEMs）、山田あさこ、他。

角銅 真実

音楽家。マリンバを始め、打楽器 自作楽器 自身の声を用いての演奏活動の他、作曲家の新作初演・コンサートや各種レコーディング・ライブサポート（cero、Doppelzimmer、野田薫 etc）、テレビ番組収録などの演奏活動、ダンス作品や映像作品への音楽提供や音楽制作、アートプロジェクトでの作品制作など演奏だけにとどまらない作家としての活動も展開している。

大田区立障がい者総合サポートセンター

障害のある方のサポート「拠点」として、平成27年3月に開設された。障害のある方もない方も、ともに支えあう出会いとつながりが実現できるように、常に進化する施設を目指している。建物は、5階建てで、《相談支援部門》《居住支援部門》《地域交流部門》《就労支援部門》の4部門がある。就労支援部門では、障害のある方が企業で安心して働き続けられるように定着支援を行っている。「たまりば」は、その定着支援のひとつで、毎週金曜日の夜に行っている。企業就労している方が立ち寄り、仲間と話したり、一緒に夕飯を食べたり、ゲームを楽しんだりそれぞれ自由に過ごしている。仕事の後、仲間と出会いほっとする場、明日からの元気をもらえる場になっているようである。更に、休日にカラオケに行ったり、飲み会に行ったり仲間づくりや生活の広がりのきっかけにもなっている。

五十嵐 靖晃

アーティスト。1978年千葉県生まれ。2005年東京藝術大学大学院修士課程修了。人々との協働を通じて、その土地の暮らしと自然とを美しく接続させ、景色をつくり変えるような表現活動を各地で展開。これまでのプロジェクトで、2005年にヨットで日本からミクロネシアまで約4000㎞、2012年に日本海沿岸をたどる約970㎞の航海を経験。“海からの視座”を活動の根底とする。代表的なプロジェクトとして、樟の杜を舞台に千年続くアートプロジェクトを目指す福岡県太宰府天満宮での「くすかき」(2010〜)や、漁師らと共に漁網を空に向かって編み上げ土地の風景をつかまえる「そらあみ」(瀬戸内国際芸術祭2013・2016)などを多数地域で行う。熊本県津奈木町では海の上にある廃校を拠点にしたアートプロジェクト「赤崎水曜日郵便局」(2013〜2016)の企画運営に携わる。TURNフェス(2016)、TURN in BRAZIL(2016)参加アーティスト。

クラフト工房 La Mano

東京郊外、町田市の小さな里山にたたずむ築90年の民家で障害のある人と共に物づくりに励んでいる場所が「クラフト工房La Mano」。工房は1992年に障害のある方の作業所として設立された。名称である「La Mano」は「手」の意味で、設立時に手しごとを中心とした物づくりで魅力ある製品を作り社会と繋がっていく、そんな思いで活動を続けている。現在の活動は大きく2つある。1つは染め、織り、刺しゅうなどのクラフト製品の制作。藍、草木で染めた糸や布を使い、手織りマフラーなどの織り製品、草木染の糸を使った刺しゅう製品、藍染の鯉のぼりや手ぬぐいなど、自然の温かみを感じる製品を作っている。2つ目は2006年から始まったアート活動。小さなアトリエでいろいろな画材を使ってそれぞれが個々の豊かな表現活動をおこなっている。26年目を迎えた活動は着実に社会と繋がりつつある。

TURN交流スペース 協力

特定非営利活動法人
シアター・アクセシビリティ・ネットワーク

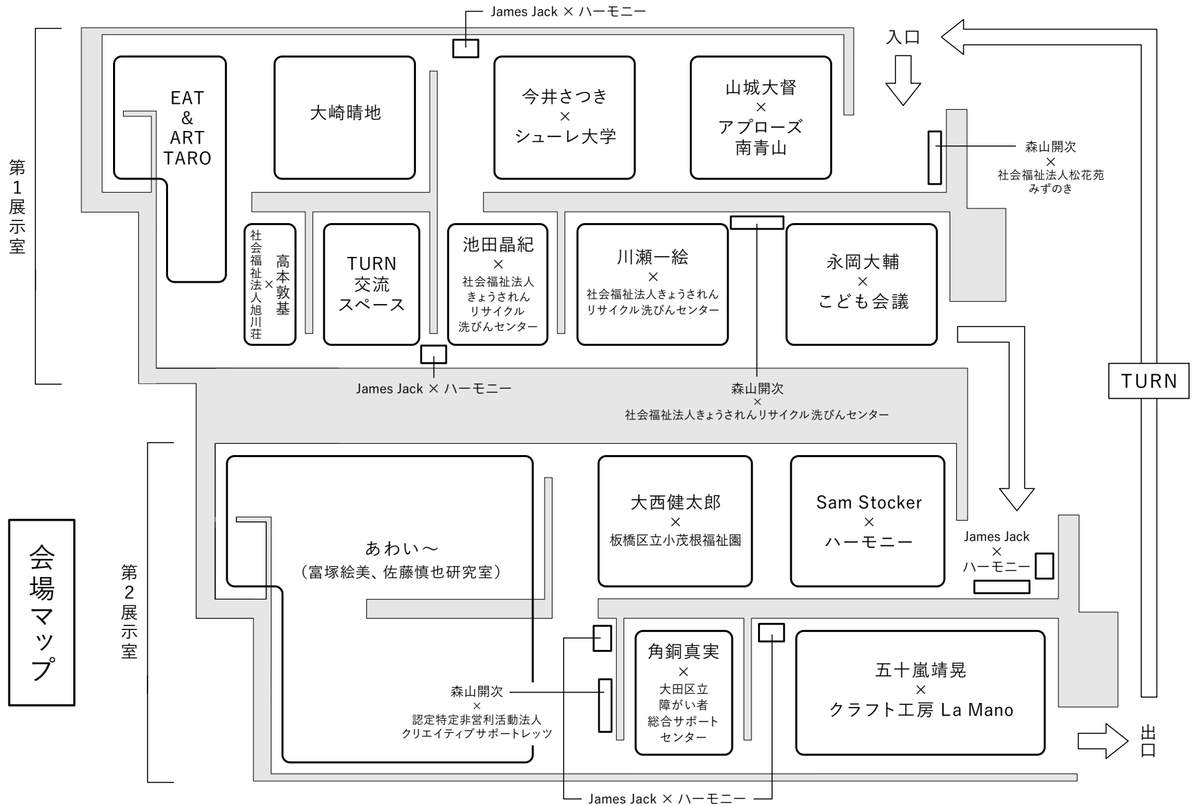
「みんなで一緒に舞台を楽しもう！」を合言葉に当事者が主体となって観劇支援を推進する活動を展開。定例会を毎月第2金曜に開催。観劇サポートに関する情報発信をFacebookやブログ、メルマガ等で行っている。

田村 大

映像演出・脚本家。故・梅本洋一氏の下で映画論を専攻。大学の同期らと共に株式会社らくだスタジオを設立後、劇映画、ドキュメンタリー、ミュージックビデオなど多様な映像制作に携わる。

〈株式会社らくだスタジオ〉
横浜国立大学卒業生を中心とし、映画制作を目的に2009年より活動を開始した映像制作会社。2015年度よりTURNの記録撮影に携わる。

＊2017年3月現在



2年目のTURN

2017年3月、東京2020オリンピック・パラリンピックの文化プログラムを先導するリーディングプロジェクトとして2015年にスタートしたTURNは、2回目のTURNフェスを終えた。そして、東京2020オリンピック・パラリンピックの開催まであと3年となった。

TURNは、2015年に次のような理念を掲げて始まった。

異なる背景や習慣を持った人々が関わり合い、さまざまな「個」の出会いを生み出す「交流」を主軸に据えたアートプロジェクトとして、一人ひとり異なる全ての人に届く新たな文化的体験をつくり出すことを目指す。

TURNフェス2を終えた後、TURNのスタートから携わっていただいた福祉施設やフリースクールなどの交流先や作家たちを訪ねた。その結果、交流プログラム※の課題と可能性を確認するとともに、2年という交流を含めた活動の時間が、TURNそのものを形にするために不可欠であったことを再認識した。TURNが標榜する「交流のあり方」を模索し続けた2年間であったが、新たな創造活動が醸成される必要な時間であったことをまざまざと見る。「時間」の堆積、経験の積み重ねが、TURNフェス1から2へ、そして3へと紡がれるだろうことを実感した。

2016年3月に初めてのTURNフェスを終えたばかりのその足で、監修者の日比野克彦と私はブラジルに渡り、サンパウロとリオデジャネイロを訪問した。ブラジルで展開した活動については、『TURN in BRAZIL 2016 ドキュメントブック　日比野克彦とブラジルでTURNした39日間』に詳しいが、プロセスと時間の流れだけここに記しておきたい。

2016年5月、サンパウロを拠点に活動する作家が約1ヶ月間東京に滞在し、「江戸つまみ」の研修を行った。そして、そこで学んだ経験を携えて、ブラジルでの交流プログラムを展開した。一方、日本からは、宮城県南三陸に滞在して「きりこ」の研修とワークショップを展開したワークショップファシリテーターと、「江戸組紐」を学んだ作家が、ブラジルに渡った。また6月中旬には、ブラジルに赴く前の勉強会のような位置づけも兼ねて、1週間にわたるトークシリーズ「私があなたにTURNする7日間」を開催している。その後、サンパウロで実施した「交流」の経験をふまえて、8月18日から9月7日にかけて、リオデジャネイロのパソ・インペリアルを舞台に展覧会とワークショップが結実するに至った。このブラジルでの一連の経験は、TURNに大きな影響を及ぼしたといえるだろう。ブラジルという国そのものが内包する多様性とTURNは出会い、交わった。帰国後の10月には、TURNスタッフ間の経験の共有も兼ね、国立新美術館にて「TURN in BRAZIL 帰国報告会」を開催している。

リオデジャネイロの会場ではTURNの包括的活動概念の説明として、「ソーシャル・インクルーシブ・アート・プロジェクト」を掲げた。障害福祉施設との交流から始まったTURNではあるが、高齢者・障害者・子供といったさまざまな立場の人たちをもふくめて共生する社会を実現しようとする新たな文化的試みとして、初年度の交流の段階から設計されていた。「交流」のコーディネートを担う奥山理子は、「健常者／障害者」という二通りの人間による交わりではないとする自覚の下、多様な交流先へとTURNをつないでいる。

そして、ブラジルにおいてTURNが掲げる理念が我々の想像以上に世界に向けて訴求性があることを知る、大きな経験となった。2016年の「TURN in BRAZIL」の活動は、2017年9月にプエノスアイレスを中心に南米諸国のさまざまな都市、地域と連携しながら同時多発的に開催される第1回目の国際現代美術ビエンナーレ「BIENALSUR」への招聘へとつながっていく。

一方、国内の展開としては、「TURNの活動を日常的に行う場所」を暫定的にセンターと呼び、交流先との定期的な構想会議が、6月から月1、2回のペースで行われた。当初TURNセンターは、TURNフェスと対になる活動軸として想定され、TURNセンターでの活動の成果を、年に一度TURNフェスとして紹介し、知見の共有を促進し、TURNの考え方と実践を広めていくものとして位置付けられた。1年目はその体制構築を待たずして、「アーティストが施設を訪ね交流する」という、とてもシンプルな行動からTURNフェスの開催を実現させたが、そのアプローチが功を奏したといえる。なぜなら、TURNの交流活動に実感をもって取り組む交流先の方々が、TURNの当事者として2年目のTURNセンター構想会議に参加してもらえたからだ。

TURNセンター構想を協議するも、どうしても着地する議論に至らず難航。11月になり監修者の日比野克彦が、TURNの活動を担うつなぎ手たちの人材育成の仕組みを別途構想するなかで、つなぎ手が「海を渡り、島に上陸」するイメージを思い描く。センターを島（LAND）に見立てたつなぎ手の活動イメージの説明と、「LAND」と言う言葉は、構想会議のメンバーにはストンとはまり、「それならできる」と場が動いた。言葉の呪縛力に驚かされ、言葉の喚起力を改めて実感した。TURNセンター構想会議での発言や交流プログラム日誌から言葉を編み『TURN NOTE　TURNを考えたときの言葉2016』として、TURNを形作る言葉を集録した。

斯くして2年目のTURNは、南米との出会いと、LANDという言葉を手にし、同時に交流プログラムを進めた年となった。「交流」「フェス」「LAND」の3つの軸でTURNの事業展開をする体制を構築することとなり、活動の幅と厚みと自由度を増す好循環を生み出している。この成果は、TURNフェス3の内容に反映されることだろう。イメージが言葉となり、言葉が具体的なアクションとなり、社会実装されていく。それまでの時間の流れを、TURNの理念、仕組み、活動の場に注ぎ込み、TURNがレガシーとなって継承されるように積み重ねていきたい。

森 司

アーツカウンシル東京 TURNプロジェクトディレクター

※ 交流プログラム

アーティストが、福祉施設やフリースクールなどコミュニティ特性の異なる場所へ赴き、その場所を利用する人や職員、家族等との交流を重ねる、TURNの根幹を成すプログラム。

TURNフェス2 ドキュメントブック 2016

2017年8月10日発行

監修：森 司（アーツカウンシル東京 TURNプロジェクトディレクター）

編集：畑まりあ（アーツカウンシル東京）

デザイン：星野哲也

写真：冨田了平（p.10~14, p.18~19, p.21~22, p.26~28, p.30~34, p.36~37）
丸尾隆一（p.4~9, p.15~17, p.20, p.23~25, p.29, p.35）
竹久直樹（p.39）

印刷：株式会社アトミ

発行：アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）
〒102-0073 東京都千代田区九段北 4-1-28 九段ファーストプレイス 8 階
Tel：03-6256-8435 ／ Fax：03-6256-8829
Email. info@turn-project.com
URL. www.artscouncil-tokyo. jp

TURN公式ウェブサイト：http://turn-project.com

©2017 Arts Council Tokyo
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture
All rights reserved

TURN FES 2 Document Book 2016

August 10, 2017

Editorial supervisor: Tsukasa Mori (Project Director of TURN, Arts Council Tokyo)

Editor: Maria Hata (Arts Council Tokyo)

Design: Tetsuya Hoshino

Photo: Ryohei Tomita (p.10~14, p.18~19, p.21~22, p.26~28, p.30~34, p.36~37)
Ryuichi Maruo (p.4~9, p.15~17, p.20, p.23~25, p.29, p.35)
Naoki Takehisa (p.39)

Printing: atomi co., Ltd.

Published by: Arts Council Tokyo (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture)
Kudan First Place 8F, 4-1-28, Kudankita, Chiyoda-ku, Tokyo 102-0073
Tel: 03-6256-8435 / Fax: 03-6256-8829
Email: info@turn-project.com
URL: www.artscouncil-tokyo.jp

TURN official site: http://turn-project.com

©2017 Arts Council Tokyo
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture
All rights reserved